解　　題

Ⅰ　はじめに

裂織(さきお)りとは、経(たて)糸に麻・藤・木綿などの丈夫な糸を用い、緯(よこ)糸に細かく裂いた古い木綿布を使った織物、また、その技法のことである。裂織りで作られた衣服は、とても丈夫で暖かく、水にも強い特性があることから、農・山・漁村の仕事着として使用された。

裂織りの分布地域は、東北地方や佐渡、能登半島、丹後半島、隠岐、中国山地など、離島や半島、山間部に多く見られ、その広がりや多種性が注目されている(中村ひろ子「サキオリの分布と分類、ならびにその系譜」『月刊染織α』No.34、1984年)。概して、裂織りは日本海沿岸の地域に分布が集中している傾向が見られる。四国地方では、これまで分布図の上で、その存在は未確認とされていたが、近年、四国の西端に位置する愛媛県の佐田岬半島で、裂織りの仕事着が使用されていたことが確認できた。

佐田岬半島は、東西約40km、南北の最大幅は約6km、北は瀬戸内海（伊予灘)、南は宇和海、西は豊予海峡に面する細く長い半島である。この地は急傾斜の山が連なり、陸上交通の整備は遅れ、長年、陸の孤島として離島的な生活が営まれていた。平地がきわめて少なく、海浜も狭いことから半農半漁の小集落が散在している。現在、裂織りの仕事着を着用する人はなく、家屋の立替えなどの際に処分され、消滅の危機に直面している。

そのため、愛媛県歴史文化博物館では、平成9・10年度にわたって、佐田岬半島の裂織りについて、調査および収集・整理を進めてきた。本稿では、当館がこれまで収集し、整理を終えたものについて、各地区の特徴を概観するとともに、現地での聞き取り調査のデータをもとに、裂織りの世代層、分布、呼称、用途、形態、材質などについて分析し、佐田岬半島の裂織りの実態を紹介したい。

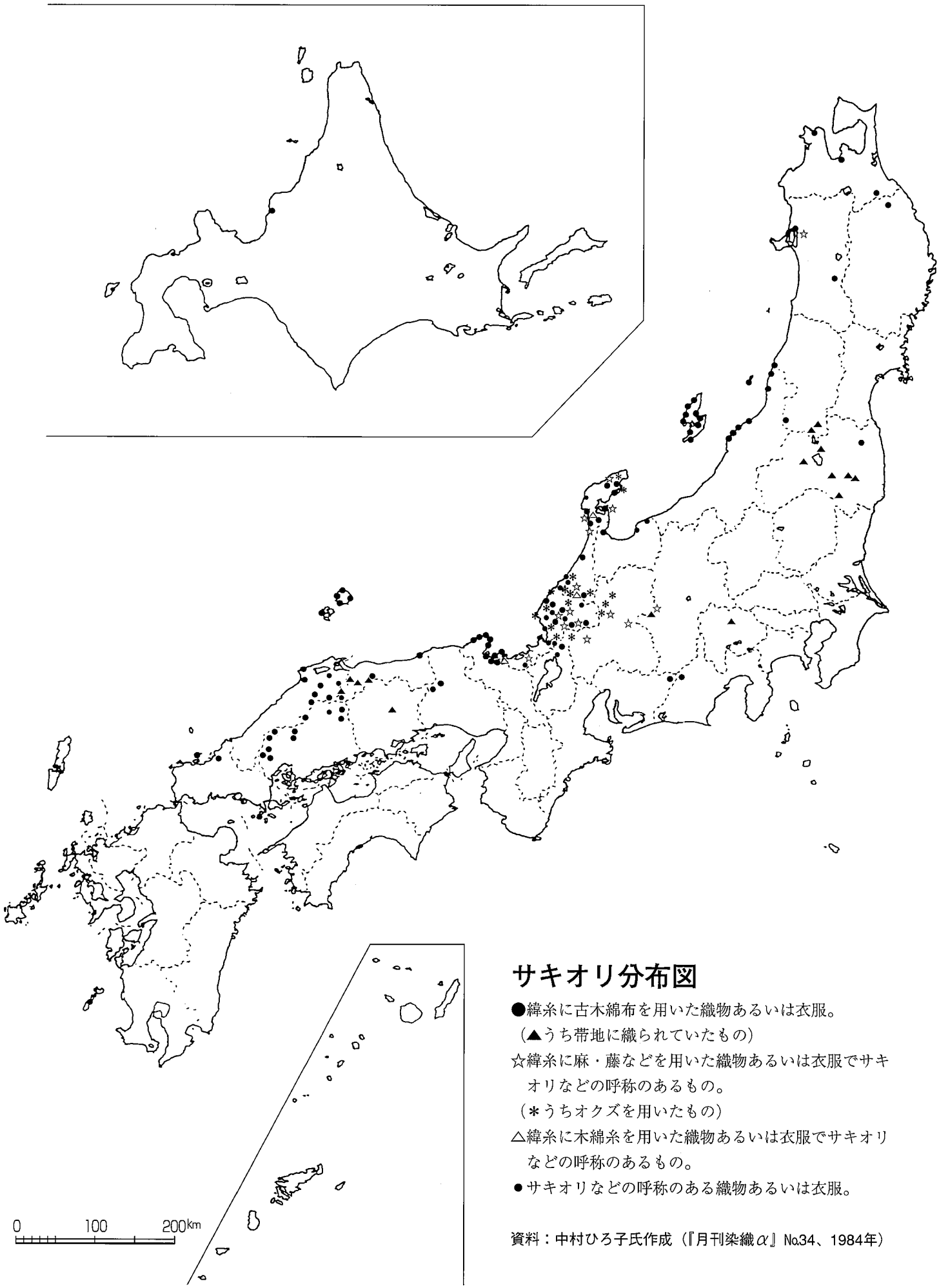
Ⅱ　収蔵資料の概要

現在、当館が収蔵する佐田岬半島の裂織りの仕事着（上衣）は46点である。それらを使用地ごとに見ると(5頁、地図参照)、半島の西端部にあたる三崎町域のもの（与侈、名取、釜木、二名津、平礒、三崎、明神地区）が29点で最も多く、中央部にあたる瀬戸町域のもの（大久、神崎地区）が10点、中央～東部にあたる伊方町域のもの（九町、川永田地区）が7点ある。また、瀬戸内海側と宇和海側で分けると各23点ある。形態別に見ると、袖なしが15点、袖ありが30点、仕立て途中のものが1点ある。その他、裂織りの帯が14点ある。資料は、おおむね保存状態は良く、中には未使用と思われるものも含まれている。

1．仕事着（上衣）

与侈(よぼこり)地区（三崎町）　　〈　〉内の番号は図版番号をあらわす。

瀬戸内海に面し半島の西部に位置する。半農半漁の集落。海抜40～100m。近世には三崎浦の枝浦で与侈浦といい、宇和島藩領に属す。旧三崎村。明治11～19年に愛媛県が編纂した『伊予国各郡地誌』のうちの『宇和郡地誌』(以下『地誌』とする）によると、与侈浦は戸数55戸、人口289人、農業49人、雑業21人、畑12町1反余、山7町9反余、歳額は大豆11石余、漁船20艘、商船1艘、物産は麦25石、大豆3石余、小豆3石余、栗3石、甘藷10,000貫、鰯1,000斤、黒布500貫とある。



サキオリ分布図

●緯糸に古木綿布を用いた織物あるいは衣服。
（▲うち帯地に織られていたもの）

☆緯糸に麻・藤などを用いた織物あるいは衣服でサキオリなどの呼称のあるもの。
（＊うちオクズを用いたもの）

△緯糸に木綿糸を用いた織物あるいは衣服でサキオリなどの呼称のあるもの。

●サキオリなどの呼称のある織物あるいは衣服。

資料：中村ひろ子氏作成（『月刊染織α』No.34、1984年）

資料は２点。名称はオリコ。いずれも袖ありの上衣で子ども用のもの。小学校に通う時に雨具として着たもの〈3〉と、幼少の頃、山などで遊ぶ時に着たもの〈4〉。子ども用のものは半島でほとんど残っていない。とくに〈3〉は、袖も裂織りで作られており、現地ではトモソデと呼ばれる。経糸はいずれも木綿の色糸を用いているが、フグ漁に使用する網の縄をほどいた糸を用いることもあった。

当地でのオリコは、袖なしが多く、山仕事や畑仕事でオイコ（背負梯子）やカルカゴ（背負籠）を背負う時などに着用した。袖ありは、風を通さず暖かいので漁に出かける時に着用した。昭和35年頃まで使用された。

名取（なとり）地区（三崎町）

宇和海に面し半島の西部に位置する。半農半漁の集落。海抜100～200m、急斜面の山肌に立地する。慶長20年３月、伊達秀宗が入国の際、同行した仙台藩名取郷（現宮城県）出身の軍夫が定着した集落といわれる。近世には三崎浦の枝浦で名取浦といい、宇和島藩領に属す。旧神松名村。『地誌』によると、名取浦は戸数211戸、人口1,000人、農業758人、医業１人、雑業３人、田１反余、畑106町余、山３町余、歳額は米８斗余、大豆75石余、漁船４艘、商船10艘、物産は米１石余、大豆80石、小豆15石、小麦10石、麦150石、甘藷５石、栗８石、蕎麦５石、布海苔100貫、海鹿毛500貫、黒布3,000貫、諸魚1,000貫とある。

資料は８点。名称はツヅレ。袖なしが３点、袖ありが５点。経糸に色糸を用い、身頃を縦縞模様にしたもの〈5〉や、緯糸にさまざまな色布（絣）を用いて横縞模様にしたもの〈６～８、10、12〉がある。袖の型は巻袖のものが多い。

当地でのツヅレは、山仕事で使用し、漁で着ることはなかった。夏は袖なし、冬は袖ありを着た。男物は紺無地の袖、女物は絣袖や縞袖が多く、裂織りの袖はなかった。経糸は白の木綿糸（タコ糸）が多く、色粉で染めた糸を用いることもあった。嫁入り道具としてツヅレを持っていく者もいた。名取のツヅレは身頃の色あいが変化に富んだ装飾性が高いものが多く、裾が白いのが特徴とされた。昭和40年頃まで使用され、半島では最も遅くまで着用していた地域といわれている。

釜木（かまぎ）地区（三崎町）

半島の西部、瀬戸内海側で釜木湾の奥に位置する。半農半漁の集落。海抜20～70m、山肌に立地する。近世には三机浦の枝浦で釜木浦といい、宇和島藩領に属す。旧神松名村。明治後期～昭和初期にかけて釜木湾内で鰯網漁がさかんであった。

資料は５点。名称はツヅレ。すべて袖あり。他地域のものと比較して、経糸と緯糸の間隔が密で織目が細かい〈13～17〉。経糸は白の木綿糸、袖は巻袖で、紺無地の木綿布を用いている。

当地ではツヅレは、夏は袖なし、冬は袖ありを用いた。漁に出かける時や、山や畑での農作業、オイコを背負う時などに着物の上に着用した。また、きれいなツヅレはよそ行き用とし、三崎へ買物に行く時に着た。釜木のツヅレは丁寧に織られ、袖は紺の無地であるのが特徴とされた。戦後しばらくまで着用していた。

二名津（ふたなづ）地区（三崎町）

半島の西部、瀬戸内海側で二名津湾の奥に位置する。海抜０～20m。良港をもち、狭いながらも海岸に面した平地に立地し、商店が建ち並び、マチとしての機能を有する。近世には三崎浦の枝浦で二間津

浦といい、宇和島藩領に属す。旧神松名村。『地誌』によると、二名津浦は戸数175戸、人口863人、農業630人、医業１人、雑業51人、酒造家３人、田２町２反余、畑67町９反余、山９町１反余、歳額は米６石余、大豆56石余、漁船６艘、農耕船20艘、商船８艘、物産は米８石、大豆44石、麦256石、小麦400石、栗48石、蕎麦４石、甘藷8,000貫、鯛5,000尾、鰯1,200斤とある。

資料は３点。名称はオリコ。袖なしが１点、袖ありが２点。いずれも着古している。袖の型は巻袖で、絣の袖がつけられ、また、身頃の背中部分の劣化を防ぐために、身頃の前と後をつけかえている〈18､19〉。この方法をハリカエと呼ぶ。

当地でのオリコは、袖ありが多かった。袖なしはあまり着ることがなく、オイコの下には木綿の袷などを着た。袖ありは、山仕事、麦踏みの時に着た。また、新調したきれいなオリコは、戦前・戦中には春祭りで神輿や牛鬼をかつぐ時に着た。二名津のオリコは、男女とも絣袖であるのが特徴とされた。絣は久留米絣などを用いた。昭和30年代まで着用していた。

平礒（ひらいそ）地区（三崎町）

半島の西部、瀬戸内海側で釜木湾口に位置する。半農半漁の集落。海抜80～120m、急斜面の山肌に立地する。近世には三崎浦の枝浦で平礒浦といい、宇和島藩領に属す。旧神松名村。『地誌』によると、平礒浦は戸数41戸、人口211人、農業150人、雑業１人、田４反余、畑15町４反余、山１町６反余、歳額は米１石６斗余、大豆10石５斗、漁船９艘、農耕船18艘、商船３艘、物産は米３石２斗、大豆16石、小豆１石６斗、麦96石、小麦８石、甘藷20,000貫、栗８石、鰯50斤、鮑10貫、鹿毛藻60貫、布海苔５貫、鰯100俵、鰮1,000喉とある。

資料は９点。名称はツヅレ。袖なしが２点、袖ありが７点。身頃の経糸にオ（麻糸）を用い、緯糸の幅も比較的太く、織目が粗いものが多い〈21～26〉。これらのうち、袖ありは巻袖で、身丈・ゆきが大きく、重さも1,000ｇをこえている。また、経糸に白の木綿糸を用いるものもあり、刺し糸や継ぎ当てが多く、長く着継がれている〈27～29〉。

当地ではツヅレは、おもに山仕事で使用し、芋や麦などの収穫物を船で運ぶため、ツヅレを着てオイコを背負い、浜まで降ろした。夏は袖なし、冬は袖ありを着た。また、新調したツヅレを着て二名津に買物に出かけたり、漁に出かける時にも着た。経糸の麻は自家の畑で栽培したものを用いた。

平礒のツヅレは、経糸に麻を用い、身頃の幅が広く、袖は紺の無地であるのが特徴とされた。昭和40年代まで着用していた。

三崎（みさき）地区（三崎町）

半島の西部、宇和海側で三崎湾の奥に位置する。海抜０～20m。三崎町の中心地でマチとしての機能をもつ。近世には三崎本浦といい、宇和島藩領に属す。旧三崎村。『地誌』によると、本浦は戸数281戸、人口1,489人、農業900人、医業２人、牛馬商５人、雑業148人、僧侶９人、田９町９反余、畑112町２反余、山74町余、歳額は米67石５斗余、大豆111石９斗余、漁船30艘、商船14艘、物産は米60石、大豆60石、小豆14石、麦300石、栗28石、蕎麦６石、甘藷60,000貫、黒布700貫とある。

資料は１点。名称はオリコ。袖なし。身頃の模様が前も背中も左右対称になるように仕立てられている。桑の葉、薪、みかんなどをオイコで運搬する時や、家で藁仕事をする時に使用した〈30〉。当地ではオリコは袖なしが多く、経糸は白の木綿糸を用いた。戦後しばらくまで着用していた。

明神（みょうじん）地区（三崎町）

半島の西部、瀬戸内海側で二名津湾口に位置する。半農半漁の集落。海抜０～70m。近世には三崎浦の枝浦で明神浦といい、宇和島藩領に属す。旧神松名村。『地誌』によると、明神浦は戸数57戸、人口295人、農業212人、雑業１人、医業１人、田２反余、畑19町２反余、山３町１反余、歳額は米１石２斗余、大豆16石余、漁船11艘、商船５艘、物産は米９斗、麦150石、小豆６石、小麦18斗、栗16石、蕎麦５石、甘藷11,000貫、鰯250斤、若布40貫、黒布2,000貫、海鹿毛200貫、栄螺200、諸魚200貫とある。

資料は１点。名称はオリコ。袖あり。袖は紺木綿の無地、巻袖。経糸は紺の木綿糸を用い、緯糸は青藍・濃藍色などの布を用いている。身頃の織目が細かい〈31〉。昭和30年代まで着用していた。

神崎（こうざき）地区（瀬戸町）

半島の中央部に位置し、瀬戸内海に面している。半農半漁の集落。海抜０～110m。近世には三机浦の枝浦で神崎浦といい、宇和島藩領に属す。旧四ツ浜村。

資料は１点。名称はツヅレ。袖あり。巻袖。経糸は白い木綿糸を用い、緯糸にはさまざまな色あいのモスリン（薄地の毛織物）を使用しているため、身頃の色あいがカラフルで軽量である。また、袖には紺木綿の無地に白い木綿糸で刺し子模様があり、装飾性が見られる〈32〉。

当地ではツヅレの緯糸には裂いた木綿布をいれるのが普通で、袖ありが多く、牛をひく時や、オイコを背負う時、山で木を伐る時に着用した。袖には使用者の目印として好みの柄をつけた。戦後しばらくまで着用していた。

田部（たぶ）地区（瀬戸町）

半島の中央部に位置し、瀬戸内海に面している。半農半漁の集落。海抜０～60m。近世には三崎浦の枝浦で田部浦といい、宇和島藩領に属す。旧四ツ浜村。『地誌』によると、田部浦は戸数141戸、人口751人、農業558人、雑業16人、田５町３反余、畑67町余、山９町１反余、歳額は米22石６斗、大豆80石１斗余、漁船47艘、商船５艘、物産は米25石、大豆10石、小豆４石、麦280石、小麦14石、栗21石、蕎麦２石、甘藷70,000貫、鰯100斤、石髪50貫、鮑10貫、栄螺300、鰯60俵、諸魚100貫とある。昭和28年頃は、半島地域最大の肥育牛の生産地であった。

資料は２点。名称はツヅレあるいはニズリ。いずれも袖なしで、経糸は木綿の白糸で、緯糸には赤や紫色などの木綿の裂いた布を用い、身頃の色あいが派手である〈33､34〉。〈33〉は身頃の左右で反物の模様が全く異なる。〈34〉は子ども用のものと思われ、身頃が横縞模様で、色布を使いわけ、等間隔に織りこんでいる。

当地では、袖なしは夏に、袖ありは冬に着用した。オイコを背負う時や、牛の肥料を山に刈りに行く時、雨天の時などにカッパ代わりに使用した。戦後しばらくまで着用していた。

大久（おおく）地区（瀬戸町）

半島の中央部に位置し、宇和海に面している。海抜０～50m。近世には三崎浦の枝浦で大久浦といい、宇和島藩領に属す。旧四ツ浜村。『地誌』によると、大久浦は戸数198戸、人口937人、農業693人、雑業４人、牛馬商１人、田５反余、畑95町９反余、山９町３反余、歳額は米１石３斗余、大豆76石３斗余、

漁船57艘、商船11艘、物産は米１石３斗、大豆40石、小豆８石、麦400石、小麦80石、栗10石、蕎麦２石、甘藷200,000貫、菜種８石、布海苔10貫、黒布300貫、海鹿毛200貫とある。東西約１㎞余りの狭長な集落で、大正期以後、半島最大の牛市が開かれるなど商業的機能を有している。

資料は７点。名称はツヅレ。すべて袖あり。いずれも経糸は白の木綿糸を用いる。袖は紺木綿の無地が多いが、絣袖（縞）のもの〈38〉もある。また、袖の型は筒袖のもの〈35〉と巻袖のもの〈36～41〉がある。袖の仕立ては単のものが多く、馬のりがあいていないものも多い。

当地ではツヅレは袖ありのものをよく着ていた。山に行く時や、オイコで芋や麦を背負う時に着た。身頃幅が広く、男物は巻袖、女物は筒袖が多かった。昭和30年代まで着用していたが、牛市で着ることはあまりなかった。

九町（くちょう）地区（伊方町）

半島の東部に位置し、宇和海に面している。半農半漁の集落。海抜０～40m。半島地域の各集落のうちでは比較的平地に恵まれる。近世には九町浦といい、宇和島藩領に属す。旧町見村。昭和35年の世帯数558戸、人口2,598人（『伊方町誌』、昭和62年）。

資料は６点。名称はツヅレあるいはニズリ。すべて袖なし。経糸は木綿の白糸を用いる。緯糸に同じ布を多く用い、身頃の色あいを単調にしているもの〈42〉や、動きやすいように脇に絣木綿のマチをつけているもの〈43〉、白の経糸と絣の白地によって身頃が全体的に白い色あいのもの〈45〉などがある。

当地ではツヅレは袖なしが多く、おもに山へ行く時、オイコを背負う時に着用した。年中、袖なしを着た。オイコには芋、麦、薪などを積んだ。また、冬の防寒着や、カッパとして用いた。新調したツヅレは地区の寄合などの際に着た。袖ありは少なく、木綿のつけ袖のものはなく、袖も裂織りで作られ、老人の防寒着であった。ツヅレの男女の区別はなかった。昭和40年頃まで着用していた。

川永田（かわながた）地区（伊方町）

半島の東部、宇和海側伊方湾の奥に位置する。半農半漁の集落。海抜０～30m。近世には伊方浦の枝浦で川永田浦といい、宇和島藩領に属す。旧伊方村。昭和35年の世帯数281戸、人口1,489人（『伊方町誌』、昭和62年）。

資料は１点。名称はツヅレ。同じ色合いの裂織りの反物２枚を背縫いした仕立て途中のもの〈52〉で、衿の部分を裁断している。経糸は柿渋で染めた木綿糸を用いたものと思われる。

当地では袖なしが多く、おもに山仕事で用いた。戦後しばらくまで着ていた。

以上、各資料の詳細については、本目録に収めた観察表（54～71頁）を参照されたい。

２．裂織りの帯

裂織りの帯はツヅレオビや、オリコオビ、ボロオビ、ダテマキなどと呼ばれ、県内各地で使われている。経糸には木綿糸や絹糸、緯糸には裂いた古木綿布やモスリンなどを用いた。裂織りの仕事着と比べると色彩がカラフルなものが多い〈48～50〉。ゆるみがなく、締め心地が良いとされ、普段の着物や浴衣などの帯として使われた。昭和20年代頃に流行したといわれている。

Ⅲ　佐田岬半島の裂織り

ここでは今回整理した佐田岬半島の裂織り、とくに上衣について、半島の各地区で実施した聞き取り調査をもとに、その全体像を見ていきたい。聞き取りの調査地区は表１に示す53地区で、半島周辺の八幡浜市、三瓶町域も対象とした。調査内容は裂織りの衣服の着用・機織の経験の有無、着用時期、名称、用途、形態・材質、作り方などで、昭和20年以前に生まれた人を対象に、計121名（内訳は明治生まれ16名、大正生まれ61名、昭和生まれ44名。男性22名、女性99名）から話をうかがうことができた。以下、調査の結果を各項目ごとにまとめた。

表１　聞き取り調査地区

三 崎 町	正野、串、与侈、三崎、高浦、佐田、大佐田、井野浦、名取、松、明神、二名津、平礒、釜木
瀬 戸 町	神崎、田部、小島、志津、大江、三机、佐市、足成、大久、川之浜
伊 方 町	大成、鳥津、亀浦、伊方越、田之浦、九町、豊之浦、川永田、湊浦、大浜
保 内 町	雨井、川之石、須川、宮内、喜木津、広早、磯崎
八幡浜市	向灘、津羽井、舌間、合田、川名津、穴井
三 瓶 町	長早、周木、蔵貫浦、蔵貫村、皆江、下泊

１．裂織りの世代

裂織りの仕事着を実際に着用した経験がある者は72名で全体の約６割にあたる。これらを世代別に見ると、表２に示す結果となる。着用経験者数では、大正生まれの人が多い。これは聞き取りした話者のうち大正生まれの人が最も多かったことにもよるが、世代別の話者の総数に占める割合では、明治生まれの人が高い。全体の傾向としては、明治、大正、昭和へと世代・年齢層が下がるにつれて、着用経験者数が減少していることがわかる。また、使用者は、ほとんどの地域で老若男女が着用していたが、伊方町伊方越、三崎町松地区では女性が、伊方町豊之浦地区では男性がおもに着用していた。使用年代については、個人差は当然あるが、実際に着ていた人のうち回答があったものをまとめると表３の結果となる。これによると、使用年代は戦前までで、戦後は着用していないとする人も若干数いるが、各世代とも多くは戦後しばらくまでは着用しており、使用年代の下限は昭和40年代に求められる。また、半島で遅くまで着用していた地域は、三崎町名取・平礒、伊方町九町地区などである。

次に、表２から裂織りを機で織っていた世代を見ると、おもに明治生まれの女性が織っていたことがわかる。織っていた時期は大正時代から昭和10年代頃までとされる。大正生まれの人の多くから、その母や祖母がかつて織っていたとの証言があり、裂織りは明治期の女性の手仕事によって生産されたことがわかる。

表２　裂織りの世代

世代・年齢層	聞き取り者数	着用経験者数			世代別の話者の総数に占める割合(%)	機織(製作)経験者数		
		男性	女性	小計		男性	女性	小計
明治生まれ(明治35～45年)	16	1	11	12	75	0	9	9
大正生まれ	61	3	34	37	61	0	2	2
昭和１ケタ生まれ	31	7	10	17	55	0	0	0
昭和10年代生まれ	13	4	2	6	46	0	0	0

表３　使用年代

※地区名（人数）

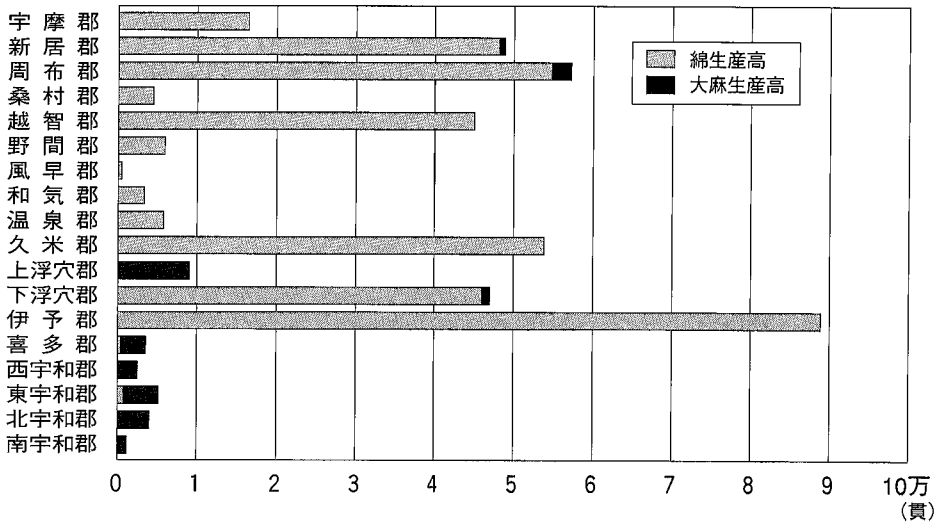
世代・年齢層	戦時中まで	昭和20年代まで	昭和30年代まで	昭和40年代まで	戦後しばらくまで	子どもの頃まで
明治生まれ(明治35～45年)	小島(1)	大浜(1) 川之浜(1)		平礒(1) 九町(1)		
大正生まれ	伊方越(1)	伊方越(1) 川之浜(1) 名取(4) 田部(1) 神崎(1)	鳥津(1) 足成(1) 井野浦(1) 与侈(1) 大久(1) 九町(1)	田之浦(1) 井野浦(1)	川永田(3) 湊浦(1) 豊之浦(1) 大久(1) 川之浜(1) 田部(2) 三崎(2) 九町(2)	三机(1)
昭和１ケタ生まれ	亀浦(1) 井野浦(1)		大成(1) 志津(1) 明神(1) 二名津(1)	平礒(1) 九町(1)	田部(1) 串(1)	正野(1)
昭和１０年代生まれ			二名津(1)	名取(1)		田部(1) 松(1)

２．裂織りの分布

佐田岬半島において裂織りの衣服（上衣）を使用していた地域は、聞き取りでは、三崎町、瀬戸町、伊方町の全域、保内町の一部の地域で確認できる(53頁、佐田岬半島裂織り地図参照)。八幡浜市、三瓶町域では現在のところ確認できていない。「半島部では裂織りの衣服をおそくまで愛用した。保内から東はほとんど着ていなかった」（大正７年生、男性、伊方町九町）と証言があるように、瀬戸内海側の保内町喜木津地区、宇和海側の保内町川之石地区あたりを境界に、それより西側の地域（半島部）に分布していることがわかる。保内町域で分布の境界がある理由について、「伊方から西は山が深く、保内の川之石には、早くから紡績工場があってマチであったため（大正３年生、女性、伊方町大浜)」、「保内は八幡浜市に近く、田舎であったが半島部に比べると都会であったため」（大正４年生、女性、保内町須川）とされた。保内町川之石地区は、明治21年に四国で最初の紡績会社が設立され、明治～昭和期にかけて紡績業がさかんな工業地となり、半島では、早い時期に裂織りを着る人がいなくなった地区と考えられる。

裂織りの全国的な分布については、日本海沿岸の地域に集中し、離島や半島、山間部に多いことは先述のとおりで、その背景としては、これらの地域が木綿栽培に適さない寒冷地であったことと、北前船などによる古木綿布の流通があったことが考えられている。佐田岬半島の裂織りの起源を示す文献史料は現時点では確認できず、その詳細はわからない。図１は明治21年の愛媛県の郡別の綿・大麻生産高を示したもので、これによると、半島が属する西宇和郡域では綿の生産がほとんど行われていなかったことがわかる。また、半島は急傾斜で細長い地形にはばまれ、陸上交通の整備は遅れ、昭和33年に県道八幡浜・三崎線が全線開通するまでは、長年、陸の孤島であった。明治以降、半島の主な集落間を廻る沿岸航路や、大阪や九州方面からの遠洋航路などが就航され、人や物資の往来には海上交通に拠っていた。裂織りの材料がどこから、どのような経路で持ちこまれたか、今後の課題である。ただし、少なくとも、半島内での裂織りの流通は、聞き取りで確認できた。それによると、「近所から頼まれて母が織っていた。お金をとることはなく、麦などと交換した。正野、串、三崎に行き、織ったものを物々交換した」（大正10年生、男性、三崎町与侈)、「地元で織ったものを売るものがいた」（昭和２年生、男性、伊方町九町)、「鳥津集落から売りに来る者がいた」（大正６年生、女性、瀬戸町足成)、「集落で織る人がいないので、裂織り

図１　明治21年の綿・大麻生産高
『愛媛県産業地誌』（昭和40年）より



の反物や着物を売りに来ていた」（大正10年生、女性、三崎町井野浦）、「集落内では織っていないので、一枚買ったことがある。値段は高くなかった」（大正５年生、女性、伊方町田之浦）、「戦時中、５円で買った」（大正4年生、女性、瀬戸町大久）、「集落内では織る人がいなかった。染めの人が売りに来た。１着50銭～１円した」（昭和５年生、女性、瀬戸町佐市）。これらのことから、物々交換や裂織りを商品として売買する行商人の存在が注目される。

ところで、県内では佐田岬半島以外の地域で、城川町野井川地区（城川町立歴史民俗資料館所蔵、袖あり１点）、肱川町（肱川町立歴史民俗資料館所蔵、袖なし１点）で裂織りの衣服が確認できた。また、野村町惣川地区でも使用されていた（『惣川の民俗』、昭和39年）。おそらく、明治時代以前には、より広範囲で裂織りの衣服を使用していたと思われるが、いずれにせよ、佐田岬半島が最も遅くまで裂織りの衣服を使用していた地域であることは確かである。

３．呼　　称

裂き織りの衣服の呼称は地区によって異なる（佐田岬半島裂織り地図参照）。大別すると半島では「オリコ」、「ツヅレ」、「ニズリ」の３つの呼称が用いられ、「サキオリ」とは呼ばれていない。オリコと呼ばれる地域は、おもに三崎町二名津・三崎・井野浦地区から正野地区にわたり、半島の先端部に集中している。ツヅレの場合は、おもに三崎町平礒・名取地区から東側の地域にわたり、半島の中央・東部にかけて広く見られる。ニズリの場合は、袖なしのものに使われている別称で、袖なしを中心に着用していた地域に多い。また、それぞれの名称の由来については、オリコは「布を織り込む」「機を織る人」、ツヅレは「ボロ布を綴る」、ニズリは「荷を担ぐ」の意味からきたと思われる。

４．用　　途

用途として最も多かったのは、農家の山仕事の着物として、とくに、オイコ（背負梯子）専用の着物として使われたことである。「ツヅレを着ずに山に行くことはなかった」（大正7年生、男性、伊方町九町）といわれていた。オイコで農作物などを背負う時に着用すると、肩の負担が軽減されるとともに、着ていた衣

類を傷めないので重宝された。このことは、ほとんどの地区で言われており、この場合、おもに、袖なしが用いられた。その他の用途としては、冬期の防寒着、漁で沖に出る時の防水着（伊方町九町・鳥津、瀬戸町小島、三崎町釜木・与侈地区）、小雨の時のカッパとして着用した。これらの場合、おもに袖ありが用いられた。また、新調したものを着て、三崎に買物に出かける時や（三崎町釜木・平礒地区）、地区の寄合に参加する時（伊方町九町地区）、祭りで神輿や牛鬼をかつぐ時（三崎町二名津地区）など、山着としての利用以外に、一部の地域では沖着物、買物着、訪問着、祭礼着として用いた。

5．着装方法

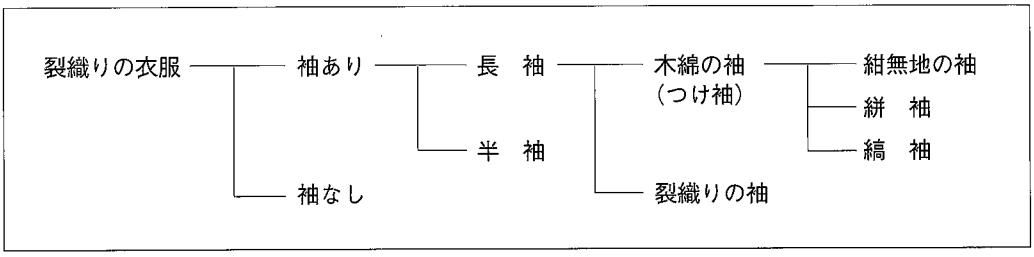
聞き取りでは、「男の人は裸の上に直接着る者もいた」（明治38年生、女性、伊方町九町）、「ツヅレの下には、薄い着物を着た。直接、肌の上に着ることもあった」（大正７年生、男性、伊方町九町）、「ツヅレの下には長着を着て脚絆をつけ、藁製の山草履をはいた」（大正２年生、女性、三崎町釜木）、「ツヅレの下には、モンペのない時代、膝まである木綿の単衣を着て、頭に手拭、足に脚絆、藁製のアシナカ（足半）、手に手甲をつけた」（明治38年生、女性、三崎町名取）、「ツヅレの下衣は、コギノ（木綿の単衣）を着た。手にはテホイ（手甲）、足には脚絆をつけ、地下足袋と草鞋をはいた」（明治45年生、女性、三崎町平礒）などの証言があった。ツヅレを着ることを伊方町九町地区では「ツヅレをひっかける」といった。

6．形態・材質

①袖

袖の種類から形態を分類すると図２の結果となる。袖なしは、必要な丈や幅に織った裂織りの反物２枚を、背中と脇で縫いあわせたシンプルな衣服である。袖ありは、袖が木綿布（紺無地、絣、縞）と、裂織りの布からできている。また、裂織りの半袖もあったとされるが、実物は確認できていない。

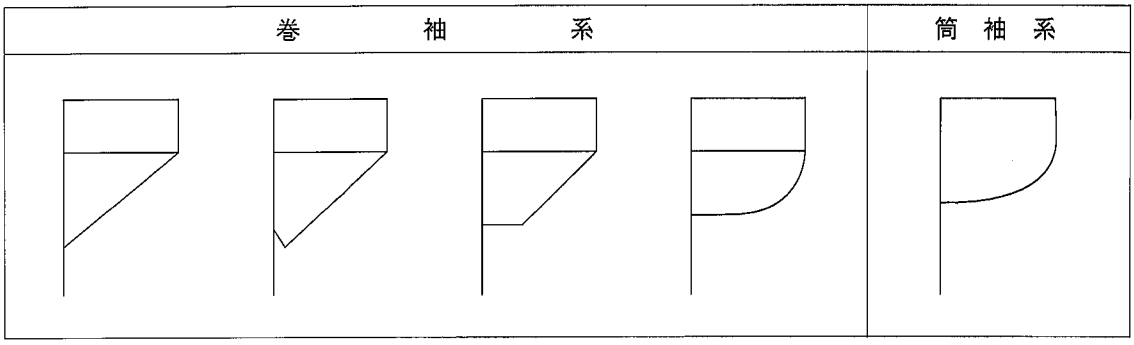
図２　形　　態　　※半袖の実物は未確認。



聞き取り調査では、地域によって、袖なしを主体に使用していた地区と、袖ありを主体にしていた地区があることがわかった（佐田岬半島裂織り地図参照）。袖ありの場合、紺木綿の無地の袖をつける地域が多いが、三崎町名取地区では「男物は紺無地、女物は絣や縞袖であった」（明治38年生、女性）、二名津地区では「男女とも絣袖のものを着た。好みの柄をつけた」（昭和４年生、女性）とあり、各地区の特徴を示している。また、瀬戸町神崎・大久地区では紺無地の袖に木綿の白糸で刺し子模様を施した装飾性が高いものもあった。袖は衣服の中で最も変化に富んだ部分であったことがわかる。また、袖の型は図３に示すように、巻袖系と筒袖系に大別される。一部に筒袖のものもあるが、ほとんどは巻袖であり、動きやすく、重ね着ができるように袖にゆとりをもたせている。巻袖の中には、袖下を少し折った台形状のもの（現地でツツソデと呼称する）や、袖下に口（身八口）があいているものがある。これについて、瀬戸町大久地

区では、「男の袖は三角形状の巻袖、女物の袖は袖下を折った筒袖で、女の袖を筒袖にするのはおしゃれだった」（大正７年生、女性）とし、三崎町平礒地区では「口の有無で男女の区別はなく、動きやすさのため」（明治45年生、女性）とされた。

図３　袖　型



裂織りの袖をもつ衣服は、かつて三崎町与侈、瀬戸町佐市、伊方町田之浦・鳥津・九町・亀浦地区などで使用されていたが、現在はほとんど残存していない。

②経糸・緯糸

裂織りの衣服の経糸には、ほとんどの地域で木綿糸を用いた。その場合、丈夫なタコ糸を用いることが多く、漁業が盛んであった地域（三崎町与侈、伊方町鳥津地区）では網糸を使っていた。糸は購入され、色は白糸が多いが、藍や柿渋、色粉で染めたものもあった。また、三崎町平礒地区では経糸に麻糸を用いた。「オ（麻糸）は自家のカネダ（畑）で栽培し、冬に植えて春に収穫し、川に浸け、炊いた麻の皮をはぎ、ビービー（糸車）にかけてオを生む（糸にした）」（明治45年生、女性、三崎町平礒）とあり、麻は自家で栽培していた。

緯糸には、裂いた古い木綿の布を用いた。その材料は、蒲団や着古した着物などであり、基本的には木綿を用いたが、派手な色布や分厚い布、古くなって傷んだ布は使用されなかった。なお、瀬戸町神崎地区に、緯糸にモスリンを入れたものがある。

③身頃

身頃は緯糸に使う布の種類や色によって、さまざまな色あいのものがあるが、派手なものは少なかった。注目したいのは、佐田岬半島の裂織りの身頃の裾部分は、ほとんど白色である。おもに晒やふんどしなどが緯糸に用いられている。白色にする理由については、「おしゃれである」（大正７年生、男性、伊方町九町）、「体裁が良くなるから」（大正５年生、女性、伊方町田之浦）、「昔から白いものだと決まっているから」（明治45年生、女性、三崎町平礒）、「白い裾なら汚れ具合がわかるから」（大正８年生、女性、伊方町鳥津）、「裾はあまり汚れないので白布を用いる」（昭和８年生、女性、伊方町大成）といわれている。裂織りに白布を用いると、他の柄がひきたつ効果があり、体裁を良くするためのデザインであったと考えられる。また、白はハレの日に着る衣服とされ、半島でツヅレを婚礼道具として持参した人がいることから、婚礼衣装の名残として裾が白い身頃が作られたとも考えられる。

身頃の背と脇の縫い方は、縫いあわせた面が平らになるように千鳥がけで縫い、馬のりがあいているものが多く、動きやすいように機能性を高めている。

④衿

身頃を内側に少し折り紺か黒の木綿布をかけている（かげ衿）。衿の裏側に名前を刺繍したもの（三崎

町串地区)、衿に絣の布をつけたもの（三崎町二名津地区）がある。

⑤大きさ・重さ

半島各地の裂織りの衣服の大きさと重さについて、当館の収蔵資料を例にすると、袖なしの場合、身丈が63～84cm、身頃幅が19～26cm、重さが506～808ｇである。袖ありの場合、身丈が69～93cm、身頃幅が21～30cm、重さが734～1,176ｇである。参考として、地区ごとの身頃幅、身丈、重さの平均値を袖なしと袖あり別に求めると、図４の結果となる。

７．裂織りの作り方

実際に、裂織りを織っていた老婆(明治38年生、三崎町名取)によると、機織は母から習い、機は高機〈51、53〉を用い、ハタと呼んでいた。各家に１台はなく、織ることが好きな家にあった。機織りは昼間の明るいうちに行い、山仕事の合間に織っていた。その手順は、①織り幅にあわせて経糸をはる。織り幅は男物は８寸、女物は７寸ぐらいを目安とした（１寸は約３cm)。経糸は木綿の白いタコ糸を用いた。機が織れる状態にする（機上げ）には２時間～半日を要し、最も手間がかかる作業だった。②着古した木綿の着物や蒲団など（ボロ）を裂いて緯糸を作った。最初にボロの端にハサミを入れ、あとは手で引き裂いた。約１～1.5cm幅で一本の布糸になるように布の端から端へと根気よく裂いた。裂いたボロは玉にはしなかった。緯糸は夜に裂いて貯めていた。③緯糸に裂いたボロを入れながら織り始める。ボロにはよりをかけず、杼を使わず手で通していた。途中でボロがなくなると、次のボロを少し重ねてつなぎ目がわからないように織り込んだ。これをツグと呼んだ。絣を裂いて緯糸に入れることはあまりしなかった。あらかじめボロを裂いていれば、１日あれば１着分の反物を織ることができた。

なお、聞き取りでは、地区ごとに織り幅がおおよそ決まっていた。大久（７寸５分)、二名津（６寸５分)、平礒（８寸５分）である。このことは、地区ごとの身頃幅の平均値を示した図４にも傾向が示されている。

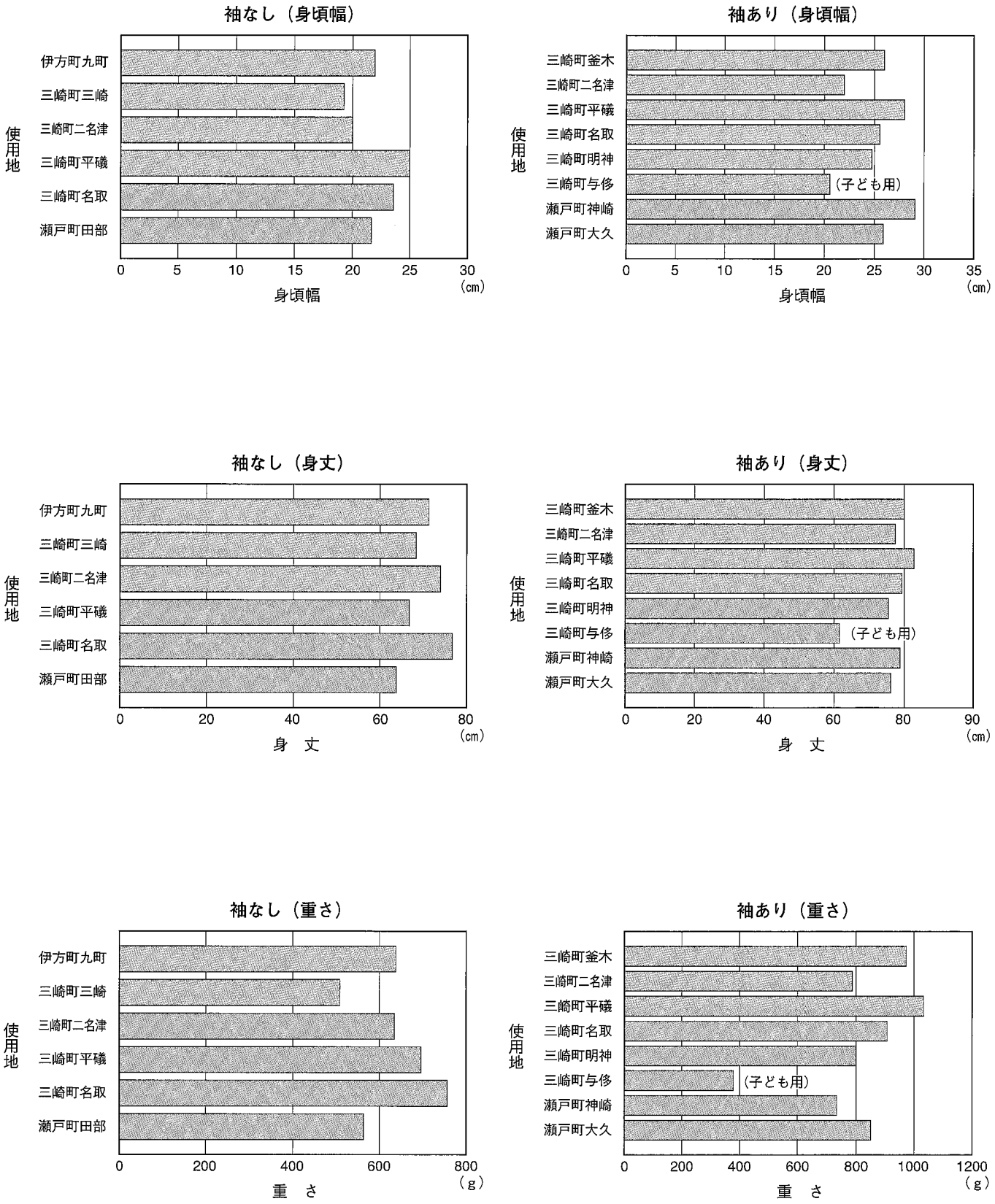
８．裂織りへの想い

佐田岬半島では、裂織りの衣服は「一人一着は持っており、人間の数ほどあった」(大正４年生、女性、瀬戸町大久)、「ツヅレを見れば、どこの集落の者かわかった」(明治45年生、女性、三崎町平礒)、「丈夫で暖かく、一枚あれば一生使える」(大正５年生、女性、伊方町田之浦)、「ツヅレは丈夫な着物の代名詞」(大正７年生、男性、伊方町九町)、「嫁入り道具だった」(大正９年生、女性、伊方町九町)といわれ、半島で暮らす人たちの、まさしく生活の必需品であったことがわかる。それはまた、ボロ（古布）などの廃品をいかすために生まれた生活の知恵の賜物でもあった。「村長が松山に村の紋付としてオリコを着て行った」(昭和４年生、女性、三崎町二名津）という話や、九州の大分に櫨ちぎりの仕事に行く時もオリコを着て行き、現地の人に「鎧を着ているみたいだ」(大正10年生、男性、三崎町与侈)といわれた笑い話もある。佐田岬半島の人たちは、裂織りの衣服に強い愛着と、郷土の伝統的な衣服としての誇りをもっていた。

９．裂織りを着なくなった理由

裂織りを着なくなった理由については、様々な証言があったが、集約すると、①道路が開通し、自動車で農作物を運ぶようになったことや、急傾斜地に農作物運搬用のモノレールが普及したことなどにより、モノを背負うことがなくなったこと。 ②軽くて丈夫なナイロン製の衣服（ヤッケなど）が普及したこと。

図４　地区別平均値（身頃幅・身丈・重さ）



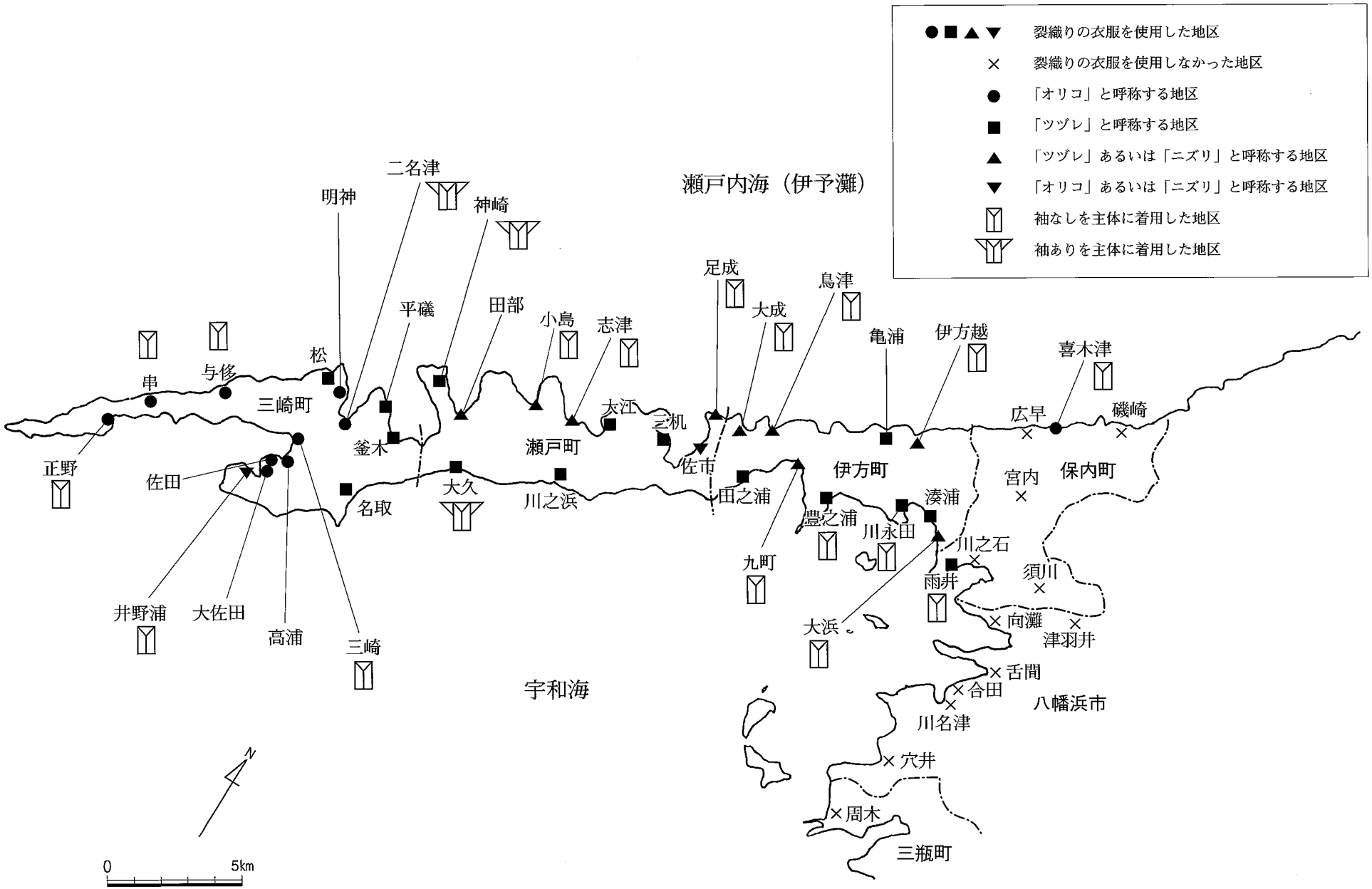
③裂織りを作る織り手がいなくなったこと。④若者が流行を追って古いものを嫌がること。こうした要因により、次第に、裂織りの仕事着が半島から消えていったと考えられる。

Ⅳ　おわりに

当館の収蔵資料をもとに各地区ごとの特徴を概観するとともに、聞き取り調査のデータをもとに、佐田岬半島の裂織りの実態について述べてみた。聞き取りの調査不足は否めないが、おおよその全体像をあらわすことができたと思う。今後の課題として、佐田岬半島の裂織りの仕事着に見られた地域差や共通性の問題を、地域のもつ生活環境とのかかわりや、衣生活の全体から構造的にとらえる必要がある。また、裂織りの分布については、衣服以外の帯なども視野に入れて調査する必要がある。

最後に、聞き取り調査にあたって、ご協力いただいた関係機関ならびに諸氏に感謝申し上げます。

（今村　賢司）


●■▲▼ 裂織りの衣服を使用した地区
× 裂織りの衣服を使用しなかった地区
● 「オリコ」と呼称する地区
■ 「ツヅレ」と呼称する地区
▲ 「ツヅレ」あるいは「ニズリ」と呼称する地区
▼ 「オリコ」あるいは「ニズリ」と呼称する地区
袖なしを主体に着用した地区
袖ありを主体に着用した地区
瀬戸内海（伊予灘）
宇和海
二名津
明神
神崎
平礒
田部
小島
志津
足成
大成
鳥津
亀浦
伊方越
喜木津
広早
磯崎
串
与侈
松
三崎町
釜木
瀬戸町
大江
三机
佐市
正野
佐田
名取
大久
川之浜
田之浦
伊方町
豊之浦
湊浦
川永田
川之石
九町
雨井
宮内
保内町
須川
向灘
津羽井
井野浦
大佐田
高浦
三崎
大浜
舌間
合田
川名津
八幡浜市
穴井
周木
三瓶町
N
0
5km

佐田岬半島裂織り地図